

2. 終戦前後の旧制高校と青春一四国のケーティを中心に

依岡隆児

1、はじめに

旧制高校は、戦前まで各界のリーダーとなるエリートを輩出し、教育史的にみても、また世界的にみても、ユニークな高等教育機関だった。旧制高校の社会装置なくして近代日本社会はなかった（竹内洋）と言われる一方で、中等教育とリベラルアーツ型教養教育の間での妥協だ（天野郁夫）とされたりし、エリートの贅沢品と揶揄され、軍国主義の旗振りを果たした側面も指摘されている（高田里恵子）¹。だが、旧制高校は単に近代的教育制度であっただけではなく、「青春」を日本の若者にもたらすとともに、地域に根差した校風を培い、愛郷心も芽生えさせ、日本の近代社会に独特の色合いをもたらした。旧制高校は、西洋文化の影響が強く受け、教養主義・修養主義を支え、ロマン主義的で脱俗的であり、「シュトゥルム・ウント・ドランク」や「ストーム」といった外来の言葉が定着するなかで若者たちが友愛を育みつつ自己を模索していくという「青春」の場でもあったのだ。

筆者はこれまで、こうした旧制高校を、近代以前の日本にはなかったとされる「青春」の醸造所とみなし、地方においてそれがいかに形作られていったかを明らかにすることを目的として、旧制高校において人気だったドイツの戯曲『アルト・ハイデルベルク』（Alt-Heidelberg）に注目してきた。この戯曲はドイツのマイヤー・フェルスター(Wilhelm Meyer-Förster)作（1901年）で、もともとは小説『カール・ハインリヒ』（1899年）という小説だったものを、後に戯曲化したものだ。皇太子の大学生活とそれへの愛惜、ならびに皇太子と市井の娘との恋愛を描くもので、「メロドラマ」とも言われる。だがここには当時の学生生活が描かれている。エリートの「青春」とそれとの別れを描き、ハイデルベルクが主人公の第二の「ふるさと」になったという設定も影響し、この作品は激動の時代を生きた当時の若者の心のよりどころとなっていたのである²。文学作品の受容研究としても

¹ 竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社、2003年
天野郁夫『学歴の社会史～教育と日本の近代』平凡社、2005年
高田里恵子『文学部をめぐる病 教養主義・ナチス・旧制高校』松籟社、2001年

² 全国の高校にもケーティがいて、それぞれの高校が「アルト・ハイデルベルク」と称されていた。
『青春風土記 旧制高校物語』4 朝日新聞社、1979年（週刊朝日編）によると、新潟高等学校については、「好きになった半玉を『アルト・ハイデルベルク』のケーティにみたてて、卒業後五十年間清純な情感を抱き続け、最近ガンで死んだその女性の墓参りに瀬波温泉を訪ねて、日本海の落日に高校時代の終焉を感じたという（32頁）。

第二高等学校については、「歌集、随筆などの他、阪妻プロで映画化された長篇戯曲『洛陽絳ゆ』の作者でもある兵庫県の文人知事阪本勝（大9）によると、次のようにまるで年齢を感じさせないロマンチストぶりである。

『センダイ！ センダイ！ センダイ！
ああそれは、日本のハイデルベルヒだ。…』（99頁）とある。

興味深い題材であろう。

四国には旧制高等学校が2校あった。1919年開校の松山高等学校と1923年開校の高知高等学校である。四国外からも多くの若者たちがここで青春のひと時をここで過ごした。拙論ではこれらの高等学校においても、旧制高校の卒業生たちの多くが母校を懐かしむ際に、ドイツの戯曲『アルト・ハイデルベルク』を引き合いに出すことに着目して、それが彼らの青春の象徴、第二の故郷となっていたことを明らかにするとともに、異文化が日本において土着化する事例としてとらえてきたのである³。

このように、「アルト・ハイデルベルク」はこの四国の二つの旧制高校においても受容されてきたのだが、では、それは第二次世界大戦の終戦前後になり、どうなったのだろうか。ところが、1950年に旧制高校は幕を閉じたが、戦時中からそれまでの期間において旧制高校の状況とその学生たちの青春については、従来あまり取り上げられてこなかった。本稿ではそこで、四国の旧制高校における終戦前後の時期に注目して、「アルト・ハイデルベルク」やドイツの文学作品との関わりから新時代における旧制高校の存在意義とその限界を明らかにしてみたい。

2、松山のケティ

四国での「アルト・ハイデルベルク」受容では、まず松山高校生たちと「松山のハイデルベルク」と言われた喫茶店との関係を中心にみてみながら、四国における戦後の旧制松山高校の青春のあり様を明らかにする。

1919（大正8）年に旧制松山高校は設立されているが、終戦前後においても若者たちに青春を体験させ、第二の故郷をもたらし、地方都市の市民たちに新しい文化をもたらししていたのである。

「こまどりのケティたち」

岡山の六高でも、すきやき屋の看板娘を射止めた学生の話が、「アルト・ハイデルベルク」と題されて紹介されている（小林宏行『六高ものがたり』（岡山文庫164）明文教出版、1993年、61～62頁）。

さらに、東京高等学校で、この劇は1930年に独逸語劇団が、46年に演劇部が戦後第一回目公演としてそれぞれ上演した（生松敬三『ハイデルベルク ある大学都市の精神史』講談社、1992年、12頁）。また台北高校でも上演されている（『台高』第4号）。松本高校同窓会誌には、『『ケティは何語りけむ野は緑』というのは高校生あこがれのアルト・ハイデルベルクに心酔したあげく生れた超主観的な句』とあり、同校の教科書にも『アルト・ハイデルベルク』が使われていた（『旧制松本高等学校ドイツ語図書目録』旧制高等学校記念館、2001年、161頁）、松江高校（授業（藤野義夫教授）でも『アルト・ハイデルベルク』などを副読本テキストに使われている（朝日新聞社松江支局編『旧制松高物語』今井書店、1968年）し、浪速高校生が「宝塚（エンデ）で「青春記」（ハイデルベルクが舞台）を観劇している（『ああ青春デカンショ～旧制高等学校物語』ノーベル書房、1968年）。「エンデ」というのは阪急線の終着駅にある宝塚劇場のことで、少女歌劇団が「アルト・ハイデルベルク」の翻案を上演していたのである。

³ 拙論「四国における『アルト・ハイデルベルク』」、平成30年度研究計総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書『異文化に照らし出された四国～外国人ならびに国際的に活躍した四国出身者の残した文献の調査・研究から～』、2019年

「こまどりのケティたち」(松山高校同窓会『真善美』⁴)には、喫茶店からこうした旧制高校の存在について証言するものである。喫茶店の女性たちは旧制高校生たちとの交流を語っている。彼女らをインタビューしたのは山下敏雄(27回文乙)、古谷綱博(27回理三)、秦敦(30回理三)である。

「ケティ」とはドイツの戯曲『アルト・ハイデルベルク』のヒロイン・旅館の娘の名前である。

“こまどり”という名を聞いただけで、そこで飲んだカルピスやコーヒーの味とともに、我等のハイデルベルク伊予の松山で過ごした三歳の青春を、甘酸っぱくあるいはホロ苦く想い出す旧松高生は数多いことだろう。アルト・ハイデルベルクには、ケティがいなければならない。“こまどり”のケティは時代とともに交替した⁵。

と、松山を「ハイデルベルク」として、そのマドンナ「ケティ」が喫茶店「こまどり」⁶の女性たちだったとする。1930(昭和5)年2月に開店し、初代カヲルは当時「県女」と呼ばれた高等女学校出の岩田カヲルだった。

「ハイデルベルクに帰って見たけれど、ケティにはもはや逢うすべもなかった皇太子カール・ハインリッヒの嘆きを、わが松高生たちは幸いにも味わわなくてもすむ」⁷と同誌に述べているように、松山高校の学生たちは自らを『アルト・ハイデルベルク』の皇太子カール・ハインリッヒに重ねて見ていた。やがて当店にロシア人との混血アケミが舞い込む。陸軍軍人で『肉弾』の作者である桜井忠温が勉強部屋に使ったという2階の屋根裏部屋に住ませた。このアケミが「こまどり」を昼は喫茶、夜はカフェーにして切り盛りするようになるが⁸、後に蒸発してしまう。

「こまどり」の二代目「ケティ」は玲子で、カヲルの娘だった。高等女学校在学時から手伝いをしていた。本格的な活動は1942(昭和17)年夏から「こまどり」が空襲で焼失した1945(昭和20)年7月26日までであった。三代目は妹娘の恵子で、1947(昭和22)年1月1日に「こまどり」が現在の場所で再開されてから、松高生のアイドルとなった。この同窓会誌が書かれた当時には、「こまどり」は大街道二丁目に現存し、三人の「ケティ」も存命であり、カヲルと恵子は「こまどり」にいて、玲子はボンというケーキ店兼喫茶店にいた。

こうした歴史を持つ喫茶店は、松山の高校生たちからは、東の学校といえば松高、西の学校と言えば「こまどり」⁹と称された。「こまどり」はこのように「我等のハイデルベル

⁴ 山下敏雄、古谷綱博、秦敦「こまどりのケティ」、松山高校同窓会編『真善美』、1984年。

⁵ 同書、389頁

⁶ 1930(昭和5)年開業。旧制高校生たちのたまり場としては他に、同じ大街道に翁堂、道後の桃源があった(『Atlas』第4号、1997年、21頁)。

⁷ 同書、389頁

⁸ 同書、394頁

⁹ 同書、396頁

ク」と、高校生たちに親しまれていたのである。所在地は大街道一丁目にあったという¹⁰。初代「ケティ」のカオルの回想では、1919（大正8）年の松山高校開校の頃にさかのぼり、「高等学校が出来たので、都会の学生さんがドカッと来て松山が一ぺんに変わりました」と言う。のどかな松山に、突如として現れたエリート集団、その半数は東京や大阪など四国以外の地から集まってきた者たちで、松山市民が受けた刺激とショックのほどは想像に難くないという¹¹。松山の一般市民から見て、地方において高等学校の存在がいかに大きな刺激であったかが知れる。カヲルは松山高校の学生たちについて、こう回想している、「松高の方には本当に可愛がっていただきました。お蔭で道も開けました。松高の方がたに恥ずかしくないものをお出ししたいという努力が、店の発展につながったと思っています。手を合わせたい気持ちです」¹²。松山の人たちが、松山高生たちのおかげで経済的にだけでなく文化的・精神的にも自分たちの発展につながったとっていて、彼らに感謝していたことが知れる¹³。

「理髪師チッターライン」

一方で、戦時中の勤労奉仕に駆り出され、空腹を抱えていた学生たち終戦後、松山高校では新時代に向けて再出発を図ることになる。いまだドイツ語も教えられていて、記念祭でドイツの小説「理髪師チッターライン」（Friedrich Hebbel : Barbier Zitterlein Novelle 1836.）が脚色されて上演作に選ばれている。『アルト・ハイデルベルク』ではないが、ドイツの文学作品を上演に選ばれたことには、旧制高校の「青春」のあり様を垣間見ることができる。

旧制松山高校同窓会誌『真善美』の藤田稔（29 回理一） 「演劇『理髪師チッターライン』の思い出」によると、これは 1948（昭和 23）年記念祭 10 月 15 日上演された。

当時ドイツ語の教科書だったヘッベル原作、短編小説「理髪師チッターライン」（石本岩根先生担当）に白羽の矢がたった。藤田が脚本することになったとある¹⁴。1948（昭和 23）年の 7 月の第 2 学年のときの石本岩根先生のドイツ語教科書だった「チッターライン」とあるが、これが何なのかは不明である¹⁵。ちなみに、当時の松山高校では英語とドイツ語が必修であり、語学（人文）重視のカリキュラムであり、西欧文化志向が根強く、学生たちへの影響が大きかったことがしれる。

狂気の父を演じた富田君は日大（芸術）へ方向転換し、現在は一流の脚本家になり、“七

¹⁰ 同書、309 頁。また『松山道後住民年鑑』（松山住宅調査会、1934 年）にはこまどりは大街道一丁目と記載されている（93 頁）が、戦後は『1953 年の松山市・今治市縦横明細地図』（日本地図編集社、第 1 版）では大街道二丁目となっている。さらに、1988 年からはまた大街道一丁目になっていた。

¹¹ 同書、109 頁

¹² 同書、511 頁

¹³ 参照、依岡、「四国における『アルト・ハイデルベルク』」、前掲書

¹⁴ 松山高校同窓会編、前掲書、496 頁

¹⁵ 原作はドイツの戯曲家ヘッベルの 1939 年作の短編小説である。1947 年に Friedrich Hebbel: Barbier Zitterlein., zusammengestellt von S. Okamoto, Miyagawa Shoten 1947 が刊行されている。また 1940（昭和 15）年には岩波文庫『ヘッベル短編集』（実吉捷郎訳）の中で「理髪師チッターライン」として翻訳されている。その他、渡辺格司訳『床屋チッターライン』（馬場書店、1947 年）もある（徳島大学附属図書館蔵）。

人の刑事” “夢千代日記 “等を生み鬼才といわれている（早坂暁）。牧師を演じた岩村君は医師となり、ネパールに半生を捧げて現代のシュバイツァーと讃えられ、現在神戸大学医学部教授。想えばあの演劇にクラスメートの個々の人生が多少なりともつながっているようにも思える。私は今一度ここに理一のみんなでつくった演劇「理髪師チッターライン」についてふり返り、若き魂のふるさとを訪ねてみたい。¹⁶

と述べている。理一（英語クラス）の第29回生である藤田がここでは当時クラスで企画上演した演劇「チッターライン」を振り返り、級友たちをしのんでいるのだが、脚本家・作家となった富田とは後に脚本家・作家になる早坂暁のことである。岩村（昇）は広島で被爆していたが医者を進み、日本キリスト教海外医療協会から派遣され、ネパールの医療に身を投じ「ネパールの赤ひげ」として知られる。彼らのその後の半生は、この演劇に不思議とつながっているとして、これを「魂のふるさと」であると称している。¹⁷

早坂が後に小説『ダウンタウン・ヒーローズ』¹⁸を書き、この「チッターライン」の芝居を登場人物たちに記念祭の出し物として行わせたのは、彼らの実体験でもあった¹⁹。語り手の「早坂」はこの映画では主役の洪介とオンケルの二人に投影されている。洪介は後に脚本家になっているし、オンケルは退学して旅回りの芝居小屋の演出家になっているのである。

映画『ダウンタウン・ヒーローズ』

早坂暁原作の『ダウンタウン・ヒーローズ』は1988年に松竹で山田洋次の監督で映画化され上演された。『シネマ旬報』990号にある山田監督インタビューによると、同時期に山田が在籍していた山口高校が松山高校との野球大会を開催したときに応援団としてやってきた山田は早坂と相まみえたという。その意味では、二人の旧制高校出身者がこの映画化を可能にしたといえるだろう。

映画は、脚本が山田洋次、朝間義隆で、山田洋次が監督を務めている。主舞台は旧制松山高校とその寮（三光寮）である。早坂暁の原作では主人公と遊郭の娼婦の話が軸である

¹⁶ 『真善美』前掲書、496頁

¹⁷ 週刊朝日編『青春風土記 旧制高校物語①』（松山高等学校）朝日新聞社、1978年によると、岩村昇（米子医大）は昭和30年代の後半からネパールへ行っただけになり、ネパールのシュバイツァーと呼ばれている。昭和石油中央技研の藤田稔（阪大工・工博）は演劇部のリーダーで、松高二年のとき『理髪師チッターライン』の脚本、脚色、演出を担当する。主役の富田祥資は演劇のとりこになり、松高理科から日大芸術学部へ進む。ペンネームは早坂暁。日本放送作家協会理事長をつとめる。伝道医師の岩村が牧師の配役だったのにもかかわらず縁を感じさせるとある（268）。さらに、「ご先祖さま」たちのアイドルだった「勝関のメッセン」岩田カヲルさんにも会った。七十歳の彼女は、いまも松山市大街道のレストラン「こまどり」のレジにすわる。カヲルさんが県立高女に入ってまもなく松高が創設された。自酒勝関を売る店の看板娘だったところから、ニックネームがついたとのことである。岩田カヲルは「生徒さんはみんないい方ばかりでした。店では天下国家を論じ、文学や芸術の話をしていることが多く、いろいろ教えられました。ご先祖さんであれ、どんじり会であれ、みんな心の友です」（274）と語っている。

¹⁸ 早坂暁『ダウンタウン・ヒーローズ』新潮社、1986年

¹⁹ 『キネマ旬報』No.999、1986年8月に脚本が掲載されている。

のに、映画では“県女のマドンナ”と松高生たちの話を中心にしている²⁰。語り手にして主人公「早坂」が幼少期から半生を回想する形で語られている。「理髪師チッターライン」という章もあり、松山高校時代のこともその中で取り上げている。早坂とはペンネームであり、むろんここではフィクションとして書いているのだが、早坂本人の自伝的要素が含まれている²¹。以下、『キネマ旬報』掲載の脚本から、内容をみってみる。

文科一年乙類のドイツ語講読の授業から始まる。教師はドイツ詩を翻訳しているが、ナレーターで主人公の志摩洪介は「理髪師チッターライン」の上演計画を思い描いている。日常生活でも「エッセン essen」、「オンケル Onkel」、「リーベ Liebe」、「ゲル Geld」、「ダンケ Dank」という言葉が飛び交い、寮の壁にはゲーテの詩「憧れを知る者のみ わが悩みを知らぬ」と書かれている。

やがて、寮の演劇コンクールで東寮がヘッベルの「理髪師チッターライン」をやることになる。アガーテ役を県女の生徒に決める。アガーテは父親のチッターラインばかりか、弟子のレオンハルトに愛されていて、チッターラインがその娘を愛するがゆえに狂うということを観客に納得させるほど、美しい「メツチェン」(Mädchen)でなくてはということ、県女の中原房子に白羽の矢が立ったのである²²。

演出のオンケルは、上演にあたってライスシーンで落ちぶれて帰ってきた老父がアガーテとレオンハルトの前で倒れるところについて、父親が倒れたのだから、アガーテはレオンハルトと抱き合うのではなくて、そこに駆け寄るべきと主張するが、それはメロドラマと批判され、アガーテとレオンハルトが抱き合うことで幕とした。

このオンケルはその後、房子にラブレターを出したが、ふられてしまう。房子は、本当は洪介の方が好きだったのである。オンケルは退学して福岡で大衆演劇の興行主になり、その芝居小屋で「チッターライン」もやる。特権的な高校生活、象牙の塔にこもるより人生の意義を求めたいと²³。

旧制高校を後にした若者たちは、それぞれの道を歩んでいった。オンケルは福岡の地で芝居小屋をやっていた。その芝居では、アガーテは父にかけより抱きしめる。ここの客は救いを求めとるんや²⁴と大衆演芸に身を投じていく。一方、主人公の洪介は大学を出てシナリオライターになり、40年後の洪介がラストシーンに現れ、大学キャンパスを散策している。

早坂の小説ではこの「チッターライン」のラストシーンの改編については述べられず、ただアガーテは倒れた老父に駆け寄り抱擁し、聴衆から喝さいを受けている。ところが、

²⁰ 「山田洋次監督インタビュー」、同書、46頁

²¹ とはいえ、早坂(富田)は娼婦とともに通っていたというのはフィクションであるし(『Atlas』前掲書、19頁)、記念祭での演劇コンテストでは早坂らの「チッターライン」上演は優勝しておらず、「受賞候補の線上に浮かんだ」にすぎなかった(宇野俊一「戦後の松山高等学校と演劇」、上田朝一「松山高校演劇部私史」、『城西国際大学院紀要』第7号、2004年、64頁)。

²² 『キネマ旬報』No.999、前掲書、61頁

²³ 同書、71頁

²⁴ 同書、73頁

ヘッベルの原作は、老父がアガーテの子を初めて見て、自らが狂っていることを悟り、気を失い倒れるところで終わっていて、アガーテが老父を抱きしめるシーンもアガーテとレオンハルトが抱き合うシーンもない。また「演劇『理髪師チッターライン』の思い出」の中でもそのようなシーンについては触れていない。アガーテが倒れた老父を抱きしめるというシーンを、ヘッベルの原作に付け加えるようにすることを問題にしたのは、映画でのオリジナルな設定だったのである。

また、喫茶店「こまどり」が出てくるが、これは松高の近くにあるバラック建ての店とされ、オンケルら寮生が集まっている²⁵。「松山のハイデルベルク」とされた喫茶店「こまどり」が、この映画でも象徴的に描かれているのである。だが、原作では「こまどり」は出てこない。その意味では、映画がより旧制高校に焦点を当て地方都市松山と高校生たちの交流が中心に描かれているといえる。

「チッターライン」とリバティ

旧制高校は、籠城主義ともいわれる学生の自主自立と自由を重んじる方針が貫かれていた。そこから独特の文化が産み出されることとなる。ロマン主義的で脱俗的な教養主義・修養主義、バンカラ気風など校風は代々ひきつがれていった。だが、こうした気風は、一部の特権階級の者のみに許されるもので、与えられた自由であったともいえる。国語教師の最後の授業での、「何よりも大切なとは、自治と自由、フリーダムではなく、自ら闘って獲得する自由を表すリバティ、リバティの思想であったということ」²⁶という言葉は、新時代へのはなむけの言葉だった。一方で、学生たちは「チッターライン」の上演に見るように父であるチッターラインを原作のように倒れたままで終えることができない。この上演は、登場人物が特権的で与えられた自由に甘んじることにあがり、エリート主義から離れ大衆の中に飛び込んでいくきっかけになっていて、文字通り「ダウタウン」にあえて身を置くことからの再出発を表しているのである。それはまた同時に、逆説的に旧制高校が体現していた理想と青春の終焉を意味するものでもあったのだ。だが、原作の『ダウタウン・ヒーローズ』の「ダウタウン」のニュアンスは映画では薄められていて、タイトルの意味が伝わりにくくなっている。原作の「早坂」は娼婦のもとに入りびたり、その挙句入れ墨を彫り、大学には進まず、娼婦と駆け落ちしている。映画ではたしかに同級のオンケルの方がこの「早坂」のその後を引き受けているが、しかし主人公の洪介の方は寮生活を満喫し、卒業し大学進学しているからである。山田が1947（昭和23）年は「混沌の時代だったけど、解放感と自由が満ちあふれていた。ちょうど梅雨時の一瞬の晴れ間のように」と述べているように、「いい青春をきたな」という、終戦後の解放感と自由に満ちた一時期への思いがあったことも、映画の演出に影響していたのである²⁷。

このように、映画では原作を改編し、旧制高校により焦点を当てて、旧制高校の青春の

²⁵ 同書、62頁

²⁶ 同書、72頁

²⁷ 「山田洋次監督インタビュー」、前掲書、46頁

地を映し出しそうとしていたことがわかる。

3、高知のケーティ

次に、同じ四国の旧制高校である高知高校の戦後における青春をみってみる。「アルト・ハイデルベルク」の演劇化というトピックに注目して、その旧制高校の理想と挫折を追ってみよう。

旧制高知高等学校は文科に甲類が二組、乙類が一组。理科は甲類、乙類にそれぞれ一組ずつあった。同窓生の談によると、文甲は年間、第一外国語の英語が 270 時間、第二外国語のドイツ語が 90 時間、文乙は第一外国語のドイツ語が 330 時間、第二外国語の英語が 120 時間で、総授業時間では文乙の方が語学の時間が多かった。週 32～33 時間のうち語学が十数時間だった²⁸。

やはり、語学（人文学）重視の傾向が見られる。その名残りもあって、終戦後高知高校では、『アルト・ハイデルベルク』の上演がいち早く計画がなされた。これは上演には至らなかったが、旧制高校の「青春」の最後の輝きを放つ出来事となったといえる。高知高校においても、青春のシンボルがこの演劇だったのである。

「ケーティ騒動」

高知新聞連載「自由の空に 旧制高知高校外史」37～38 回（1982（昭和 57）年 10 月 31 日、同 11 月 1 日）にある「ケーティ騒動（一）（二）」は、この『アルト・ハイデルベルク』の上演をめぐる終戦後の青春を語り伝えている。三木正之・22 回文 神戸大学教授が書いたものである。

1946（昭和 21）年初夏のこと、『アルト・ハイデルベルク』を文化祭で文芸部約 20 人が企画した。「それは甦った平和のなかで、青春の夢があこがれのドイツへと広がったものであろう」²⁹という。この作品が地方の旧制高校生にとっても、青春の夢の象徴であったこと、そして戦時下でいったん消えていたその憧れが、終戦後によみがえったというのである。『アルト・ハイデルベルク』の岩波文庫をテキストにガリ版を切る。この本は、1940（昭和 15）年の岩波文庫『ヘッベル短編集』（実吉捷郎訳）のことである。

配役は、カール・ハインツを練木昌三、料理屋リューダーのおやじを小泉隆雄、万年哲学青年ルツ博士を三木が、それぞれ演じた。下宿はデルフェルト夫人宅となっていたのを「おやじ」に変えたのは女優が得難い事情を考慮してのことだった。

ただ、「困ったのはただひとつ、ケーティ役であった」³⁰。そこでケーティ探しが始まる。阿部孝先生のお嬢様には自分は適さないと断られた。「ハリマヤ橋近くの喫茶店ブルーバー

²⁸ 『自由の空に 旧制高知高等学校外史』高知高等学校同窓会、1982 年、85～86 頁。（「ケーティ騒動（一）（二）」は本書に転載されている）

²⁹ 同書、264 頁

³⁰ 同書、265 頁

ドに、かわいい娘がいるという」なんん人からかの情報提供があったため、さっそく交渉に行く。

店に許可を取り、ケーティ役がやっと決まった。「いよいよある朝ケーティが現れたのであった。私は今もあの、初夏の光の道を蓮池沿いに進んできた赤い日傘と白い服を忘れることができない」³¹。幸いなことにケーティは無教養ではなかった。台本の読み方といい言葉遣いといい予想以上だった。彼女がいろいろの文芸ものを読んでいることはすぐわかった。

だが、生活部のリーダーであった楠戸博君らがけしからぬと言い出す。「こともあろうに町のカフェの女給と一緒に芝居をするなどもっての外だ、高校生の名折れも甚だしい」³²と。

一方、この連載の筆者自身は「私自身、さきに書いた『胸苦しいほどの甘美な期待』のうちに、一抹の不安がこもっていたことを否定はしない」³³と、その青春の「甘美な」憧れが、現実の前に否定されることも薄々感じてもいたのである。

夏休み前に海南中学の講堂をかりて生徒大会が開かれた。文芸部からは筆者（三木）、生活部からの楠戸君が演壇に立った。「現実が夢を一周したのであった」³⁴。投票結果は 113 票対 93 票で、演劇上演は否決される。

しかたなく、芝居がなくなったことをケーティ役の女性に詫びに行く。塩尻公明先生が大会を見守っていたが、ついてきて説明してくれた。

学校外の人が参加する演劇を認めないとする狭い考え方の人がまだ多く、それが多数を占めたので、残念ながら芝居は取りやめになった。この人たちも全員こうしてあなたの前へ来て、自分たちの非力をわび、あなたにあやまっているから、どうか許してやってもらいたい。自分からも願う。—実際、先生はそうやって、大きな、丸い、底光りする艶のある頭を 17 歳の小娘の前に深々と下げられたのであった。そして続けられた。—ただ、芝居は演じられないことになったのだが、今回のことはその発端から今日に至るまで、すべてが立派な一つのドラマだった。³⁵

ケーティ役を依頼していた喫茶店の女性に、上演中止を告げ、詫びたのだが、その際に高知高校の教師・塩尻先生が付き添い、学生たちの気持ちを代弁して、ともに頭を下げたという。そこには、旧制高校の子弟関係の密で人間的なものだったことがうかがえる。「この塩尻先生のお話ですっかり魂が洗われたように感じ、お話の間こそ声をあげて泣いたものの、終わった後は、晴れやかな気分で引きあげた。ケーティと私たちとの友情はその夏以

³¹ 同書、266 頁

³² 同書、266 頁

³³ 同書、266～67 頁

³⁴ 同書、268 頁

³⁵ 同書、268 頁

降もしばらく続いたが、芝居のことは二度と話題にのぼらなかった³⁶。ここで、塩尻先生というのは、法制経済担当の塩尻公明のことで、名物教師で人格者と知られて、学生たちから人気があった³⁷。

この騒動自体が『アルト・ハイデルベルク』を地でいっているようなものだった。奇しくも塩尻先生が「ドラマ」だったと述べたように、身分違いの皇太子と宿屋の娘の悲恋と学生団の青春は、ここ高知という地方都市のなか、高校生とカフェの女給という設定で演じられていたともいえるだろう。

さらに、『自由の空に』では、『ケーティ騒動』二つの問題を中心」でこの騒動の問題点を整理している。

- ・女性の職業 女生徒であろうと、女給であろうと異なることはない
- ・職業について勝手な高低をつけるのは更に世間そのもののあやまり
- ・彼女は努力しまじめさをもっている
- ・女性を人間として見た場合、どんな人間であるかで理解されたであろう³⁸

と、性や職業にとらわれず、人格や人間性をこそ評価するというリベラルな考えが、学生たちの中には育まれていたことがうかがえる。

「我々は他ならぬアルト・ハイデルベルクを選んだのである。地位の問題では大公殿下と酒場の娘との、あはい恋を人心とする可憐な作品である」³⁹としていて、『アルト・ハイデルベルク』を上演作に選んだ理由は、地位や身分を越えた恋を描くものだったと考えられていたことがうかがえる。戦後民主主義が強く意識されているともいえるが、一方でこの作品自体に潜在する旧体制や身分制度こそが、ロマチズムの正体でもあったことも否定できないだろう。

旧制高校の青春の延長であるとともに、新時代の民主主義への希求とともにそれを実践しようとするも、まさしく自由を育んできたはずの旧制高校によってそれが阻まれてしまった。この上演計画自体が『アルト・ハイデルベルク』の青春であったが、一方で、旧制高校のエリート主義、貴族主義が新時代には障害となったことが、この「ケーティ騒動」では期せずして明らかにされていたのである。

『ケンチとすみれ』

ちなみに、戦前から終戦後の高知高校については、テレビドラマ『ケンチとすみれ』にも描かれている。『自由の空に』に掲載された『『ケンチとすみれ』の余話』は、原作者である阪田寛夫による回想である⁴⁰。後に作家となる阪田は旧制高知高校出身で、同期には三浦朱門がいた。彼らに旧制高知高校の同窓生たちとともに、後に東大に進み、第15次『新

³⁶ 同書、268頁

³⁷ 谷原長生「塩尻公明先生の思い出」『高知、高知、あゝ我母校』旧制高知高等学校同窓会、1972年、498～502頁

³⁸ 『自由の空に 旧制高知高等学校外史』、前掲書、271頁

³⁹ 同書、271～272頁

⁴⁰ 阪田寛夫「『ケンチとすみれ』の余話」、同書、245～253頁

思潮』を1950年に創刊することとなる。『ケンチとすみれ』の余話』によると、1966（昭和41）年12月、NHK 藤村恵からの依頼で、西村卯一『住み方の記』をもとに、舞台は高知高校に移し、旧制高知高校を舞台にしたドラマを制作した。1934（昭和9）年に時代を変えて、主人公は高知高校理甲1年建築家志望 立浪健一（ケンチ）である。この点についても、阪田は「私自身の時代に『高校生活』が無いのだから致し方なかった」⁴¹と述べているが、ケンチのモデルは阪田の同級の三浦朱門である。

阪田はドラマのための取材で、藤村と二人で高知・足摺にまで足を運び、高校の先生だった八波直則先生にも会いに行っている。また、ここでも喫茶店が登場していた。ベッケン、ムーラン、翁堂、森永、明治、マロニエ、といった名前が出てくる。おでん屋「ゼンペイ（善平）」のおかみ「栄ちゃん」が懐かしまれていて⁴²、ここが当時の高知の高校生たちのたまり場であったことも想像される。旧制高校生たちの青春や人間的な魅力のある仲間や師との関係が地方で育まれていた。たしかに、それが戦時下ではなく、1934（昭和9）年に移されていた。戦時下においてはすでに青春は失われていて回顧されるものになっていたのであるが、旧制高校の青春はやはり同窓生たちや地域の人々の中では戦時中、終戦後においても受けつがれていたのである。

4、おわりに

以上、本稿では『アルト・ハイデルベルク』やドイツの文学作品をめぐって、終戦後の四国の二つの旧制高校をとりあげ、新しい戦後の時代における、その存在意義と限界との明らかにしようとしてきた。『アルト・ハイデルベルク』に象徴されていた旧制高校の青春は、確かに日本の若者たちに青春という体験をもたらし、自由で豊かな人間関係と生き方を育んだ功績は否定できないだろう。地方においても、旧制高校が青春を土着化し、地方都市に文化的刺激と交流をもたらしたのである。だが一方で、ここで終戦直後の新時代の入り口においてその『アルト・ハイデルベルク』が体現するものが、与えられた自由にすぎなかったことも露呈してしまった。とはいえ、そんななかでも、本稿で見たように、「こまどりのケティ」における地元の人々の証言、ならびに『ダウンタウン・ヒーローズ』映画化と「ケーティ騒動」は、青春の足跡をそれぞれの土地に刻み、自らの理想が旧習や古い価値観との葛藤にさらされながらも、与えられた自由から踏み出そうとしながら、東の間とはいえ新しい時代を照らし出してもいたのである。

⁴¹ 同書、247頁

⁴² 同書、249頁。また植田栄子「善平と高校生」、同書、362～363頁では、昭和9年から15年まで「善平」を経営していた植田が高校生たちのことを「客も私も共に青春時代だったことは得難い思い出の数々を醸成いたしました」と回顧している。